

目次

序章 中世文学の思想的背景	三
第一章 『方丈記』の思想とその展開	三二
第一節 『日本往生極楽記』の浄土往生思想——『方丈記』への道(一)	三三
第二節 『方丈記』と『池亭記』——『方丈記』への道(二)	四三
第三節 『方丈記』の世界	六〇
第四節 『方丈記』の無常観	六七
第二章 『平家物語』の思想とその展開	一三五
第一節 『平家物語』と末法思想	一三七
一 『平家物語』における末法思想——その思想的側面	一三七
二 『平家物語』の主題・構想と末法思想	一五三
三 『平家物語』における末法観の展開——流布本と四部合戦状本・屋代本とにみる	一九五

第二節 『平家物語』の祇王説話……………	二二五
一 祇王説話の諸本流伝……………	二二五
二 祇王説話の思想的考察……………	二六二
第三節 『平家物語』の女性像……………	二八四
第三章 『徒然草』と歌論・連歌論の思想とその展開……………	三四九
第一節 『徒然草』の無常観……………	三五二
第二節 『正徹物語』小考……………	三八五
第三節 『ささめごと』と天台教学——その論述様式にみる——……………	四〇二
初出一覧……………	四一九
あとがき……………	四三三

序章 中世文学の思想的背景

根本原理である。結果を生ぜしめるものが「因」で、その因によって生じたものが「果」で、「因」があれば、必ずそれに相応した「果」が報い、因果の理がたしかに報い現われることを因果応報というが、われわれの行為(業)について因果をみると、善の業因には必ず善の果報があり、悪の業因には必ず悪の果報があるので、これを善因善果・悪因悪果(厳密には善因楽果・悪因苦果)という。また、因果の関係は、今世だけに限らず、前世・今世・来世の三世にわたるものもされる。

日本文学における因果思想の展開は、古代(前期・後期)までは、主として宿世的・個人的因果観として、今世における個人の現況の由来の根元を前世との関係でとらえるものが多いが、中世に入ると、勿論、前代と同様な因果観を継承しながらも、特に現世的・集団的因果観へと進展し、今世における集団にみる諸現象由来の原因を今世における過去の行為(業)に求め、因果の関係を現報として今世のうちにもみるようになり、また、因果律が今世において歴然と実現するものとみて、因果歴然の理としての実証性が強調されるようになる。

末法思想とは、末法到来という思想であつて、釈尊入滅後の仏法の流通・行法ならびに世相の推移に関する正像末三時説⁽⁷⁾および五堅固説⁽⁸⁾に基づいて成立した、一切のものの衰滅を説く予言的な考え方である。正像末三時説とは、釈尊の入滅を起点として、時の経過にしたがつて、正法・像法・末法と、仏法の流通・行法がしだいに衰微し、ついには仏法滅尽にいたるといふ教説であり、正像末三時の期間については、末法は諸説一様に万年とするが、正法・像法についてはそれぞれに五百年説と千年説とが行なわれている。そして、釈尊の入滅年については、わが国では周穆王五十三年壬申(西紀前九四九年)とする説と、周匡王四年壬子(西紀前六〇九)とする説との二説が行なわれていた⁽⁹⁾。したがつて、末法到来と言つても、入末法年は、以上のいずれの説に依るかによつて、異なつてくる。わが国で最も一般的に用いられたのは、釈尊入滅を周穆王五十三年壬申とし、正法千年・像法千年とした説であり、これによつて、永承七(一〇五二)年が入末法の年とされ、この年をもつて、時代は恐怖すべき末法の時代に突入したと意識されたのであつた。

正像末三時説による末法の状態は、教のみありて行証なく、仏法全く衰微するというのであるが、正法千年・像法千年説によつて仏滅後二千年を経て末法に入るとされる末法の思想には、さらに五堅固説の第五の五百年が相当するものと考えられ、その第五の五百年の「鬪諍堅固・白法隱没」といふ状態が加えられ、ここに一般に流布した末法思想の内容が形成され、その結果、仏法滅尽と鬪諍堅固という状態が末法の基本的思想内容となつた⁽¹⁰⁾とみられる。

さらに、わが国の末法思想として、特に注目されることが、わが国の古代社会における伝統的な基本理念である仏法王法相依相即観との関連で展開した末法思想である。即ち、わが国の古代社会は、これを支える二大権威であつた王法と仏法とが、相互に依存し護助し合うことによつて、ともに栄え、その結果として、天下・国家の安泰が実現するという基本理念に立脚していたのであつたが、ここに末法の時代に入つて、仏法の滅尽が現実のものとなると、仏法の護助を失つた王法も必然的に滅尽することとなるわけである。かくして、末法という時代は、仏法と王法とがともに滅尽することを意味したわけであり、その結果、天下・国家も滅亡にいたるといふ、恐るべき危機的時代意識として醸成されたのであつた。

わが国の人びとに末法到来がいかに畏怖され、それにとまらぬ危機的時代意識がいかに人心に深く浸透していったかは、当時の記録類⁽¹¹⁾によつて如実に知ることが出来る。末法の危機観は、入末法の永承七年以前、すでに像末における末法前夜の危機意識として醸成されていたが、永承七年を境として明確に意識されることとなつた。そして、世が末法に入ると、それに符節を合わせるように、末法到来を実証するような諸々の末法的現象が出来てきた。即ち、古代王朝政権の矛盾が漸く顕在化して、政治的対立が戦乱へと展開し、また伝統的権威を標榜する南都北嶺等の仏教教団においても教団相互に、あるいは教団内部において相争うという事態が顕現し、さらには王朝貴族階級の勢力と仏教教団の勢力との対立・抗争の事態までも出来し、かてて加えて天災地変が頻出し、これによる飢饉、疫癘の流行というような諸現象は、まさに末法到来による末法現象の出現であると信じられ、末法思想はいよいよ深く人心に浸透していった。